

日本英学史学会中国・四国支部

ニューズレター

No.85

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

漱石と *Pride and Prejudice*

田村道美

会員の皆さま、明けましておめでとうございます。皆さまのご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

さて、ご承知のとおり、昨年は漱石の松山中学校赴任 120 周年の年でした。それを記念して、1 年遅れとなりますが、日本英学史学会は本年の全国大会を松山で開催する予定です。また、本年は漱石の第五高等学校赴任 120 周年にあたり、九州支部では 6 月に「漱石の英学とロンドン留学」をメインテーマとした研究大会を企画しております。

私はこれまで漱石の蔵書の書き込み、特に Cassell's National Library と The Lotus Library という叢書の書き込みについて調査し、その成果を本支部の例会や『英學論叢』上で発表させていただきましたが、私の専門は Jane Austen の作品研究で、その Austen を日本で最初に評価したのが漱石でした。漱石は『文学論』第 7 編第 7 章「写実法」の中で「Jane Austen は写実の泰斗なり。平凡にして活躍せる文字を草して技神に入るの点に於て、優に鬚眉の大家を凌ぐ。余云ふ、Austen を賞玩する能はざるものは遂に写実の妙味を解し能はざるものなりと。」と激賞し、さらに *Pride and Prejudice* の第 1 章の Bennet 夫妻の会話を丸ごと引用し、会話を通しての性格描写の見事さを詳細に分析しています。また、漱石は未完の遺作『明暗』執筆時に「則天去私」という言葉をしばしば口にしましたが、門下生たちにその心境を体現した作品は何かと問われて、Austen の *Pride and Prejudice* を挙げたと言われています。

漱石の門下生の一人野上豊一郎は漱石が絶賛する *Pride and Prejudice* を日本の読者に紹介しようと、その日本語訳を大正 15 年に『高慢と偏見（上巻）』（国民文庫刊行会）のタイトルで刊行しました。下巻（昭和 3 年刊）の「例言」に、「本書の原文は故夏目漱石氏珍藏の高価な版に依った」とあります。つまり、野上豊一郎は *Pride and Prejudice* を翻訳する際に、漱石所蔵の Macmillan 版（1899）を借り受けたことが分かります。

漱石がこの版を購入したのは英国に留学した 1900 年の末頃のことでした。留学中に読んだためか、漱石はこの原書の見返しと本文余白に英文で書き込みをしています。この書き込みや『文学論』『写実法』中の記述等を手がかりとして、*Pride and Prejudice* が漱石の作品に与えた影響を探り、漱石生誕 150 周年となる 2017 年までに成果を発表できればと考えております。

最後になりましたが、皆さまの益々のご活躍を祈念するとともに、支部への一層のご支援をお願い申し上げます。

（日本英学史学会中国・四国支部支部長）

平成27年度第2回(通算73回)研究例会報告



2015年12月12日(土)、学校法人福山大学宮地茂記念館(広島県福山市)において、本年度第2回(通算第73回)研究例会が開催されました。会場のお世話をくださり、また、当日ご講演くださった小篠敏明先生には格別のご配慮を賜りました。篤くお礼申し上げます。また、研究発表をしてくださいました河村和也先生、当日ご参集くださいました皆様方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

日時： 2015年12月12日(土) 13:30 受付開始

会場： 学校法人 福山大学 宮地茂記念館

〒720-0061 広島県福山市丸之内1-2-40 TEL : 084-932-6300

(JR 福山駅北口より徒歩2分)

開会行事(14:00-14:10) 支部長挨拶 田村 道美(香川大学名誉教授)

講演(14:10-15:20)

司会 松岡 博信(安田女子大学)

「歴史研究とICT技術の交わり—英語教育史研究のひとつの姿—」

小篠 敏明(福山平成大学)

研究発表(15:30-16:40)

司会 馬本 勉(県立広島大学)

「新制高等学校発足期の入学者選抜における英語の位置付けについて：高知県を例に」

河村 和也(東京電機大学)

閉会行事(16:45-17:00) 副支部長挨拶 上杉 進(LRT代表)

懇親忘年会(17:30-19:30) (小魚「阿も珍」さんすて福山店にて)

講演 (14:10~15:20)

「歴史研究と ICT 技術の交わり—英語教育史研究のひとつの姿—」

小篠 敏明 (福山平成大学)

【講演内容の紹介】

本講演は、歴史的英語教科書を独自のリーダビリティ指標で切り込み、英語教科書の新たな姿をあぶり出す科学的な研究アプローチについてであった。

最初に、日本の英語教科書における文法統制の史的変遷を3期(文法無統制期 1860-1887, 穏やかな文法統制期 1889-1944, 厳格な文法統制期 1947-)に分け、現在の英語教科書はさらに厳格な文法統制下で編纂されていることが指摘された。次に、独自のリーダビリティ線形指標と専用解析ソフトの開発経緯が紹介され、英語教科書をどのように分析するかが具体的に示された。最後に、英語教科書の文法統制の特徴を浮かび上がらせる研究アプローチとその一連の研究成果(教科書コーパスを用いた学年別の難易度評価と教科書間比較)が紹介され、本研究の意義に関して説得力のある説明がなされた。

本講演を通じ、学際的で前衛的な研究者としての先生の研究姿勢が明確かつ力強く伝わってきた。また、資料の解釈だけでは見えてこない新たな史実を浮かび上がらせる苦労と工夫に本研究の魅力があると感じることができた。(能登原祥之 記)



小篠先生のご講演は、「自分たちの感覚に合った『物差し』を作り出す。そしてその物差しで教科書英文の難易度を測定し、比べることができた」という問題意識から取り組まれた新しいリーダビリティ指標の開発経過のお話であった。パーマー研究の第一人者である小篠先生がなぜリーダビリティ指標と算出ソフトのご研究をされているのか。また、リーダビリティ(読みやすさ)を量ることは可能なのか。とても興味深かった。

小篠先生は(1)Palmerの外国語教授法史研究(個人研究)、(2)日本の歴史的教科書の質的量的分析(共同研究)、(3)文法統制の分析→リーダビリティ(個人研究)、そして、(4)リーダビリティ指標と算出ソフトの開発(学際的共同研究)、(5)リーダビリティ・ソフトを使った歴史的教科書の分析・比較(共同研究)とご研究を深められてきた。今回のご研究は(2)のご研究からのスタートであろう。『明治・大正・昭和初期の英語教科書に関する研究』(2001)において「英語教科書の展開に関するこれまでの研究は教科書の紹介や著書の人物評伝が中心で教科書そのものの内容を通史的に扱う研究はほとんど見当たらない」という中、「教科書のデータをコンピュータを駆使し、さまざまな方面から分析」され、英学史・英語教育史分野での日本初の試みである教科書の量的分析が行われた。

日本における歴史的教科書をさまざまな方面から分析した結果、「文法統制」を3つの時代—(1)文法無統制(1860-1887)、(2)穏やかな文法統制(1889-1944)、(3)厳格な文法統制(1947-)—に区分された。そしてそれらをベースに歴史的教科書9種と現代の教科書を使用しリーダビリティの分析を行われながら「リーダビリティ」ソフトの開発が行われている。ソフトの開発に関する過程のお話は私には理解できなかったが、学習者にとってちょうど良い教材で学ぶために「教科書英文の難易度を公正に測定」できるソフトの完成を期待している。(鉄森令子 記)

【参加者の感想】

◆小篠先生の開発された算出ソフトにより、明治期から現代までに日本の学校で使用された英語教科書のリーダビリティがまるで X-ray 写真 のように浮き出た表を目にして感銘を受けました。さらに精度の高いソフトの開発を期待しております。

<Emma>

◆教科書の英文難易度測定には私も以前から興味をもっており、Flesch-Kincaid Grade Level を用いて日韓の高等学校英語教科書を比較したことがあります。小篠先生のすばらしさは自作ツールを作成して研究を進めておられるところであり、もっと詳しくお話を聞き、このソフトを使わせていただきたいと思います。<JH4DGW>

◆小篠先生の御研究の軌跡を伺い、そのアイディアと人的ネットワークの活用力について今更乍ら想いを新たにしました。データの可視化という点においても大いに興味を感じ、更なる御発展をお祈り致します。＜Dragon＞

◆リーダビリティ指標と算出ソフトの開発に至るまでの経緯を拝聴し、ご研究への執念に圧倒されました。代表的な教科書が実際に分析され、客観的な指標が得られた後、それらの値の解釈の難しさを思い知らされました。＜もみじまんじゅう＞

◆講演をとおして小篠先生のライフワークの一端を見聞することが出来ました。教育研究者として疲れることのない姿勢が、パーマの研究から始まり、現在は共同研究で歴史教科書の *readability* を測るソフトウェア・ツールの開発にまでに及んでいます。止まることを知らない先生の研究と先生のお人柄にふれることができ、ありがとうございました。

＜Qats＞

◆小篠先生の衰えることのない探究精神に感服致しました。研究者のあるべき姿を改めて見せて頂きました。＜Mappy＞

◆小篠先生は自ら ICT を駆使した最先端の研究を担っておられると同時に、若手研究者の育成、理系研究者との協同など、まさに研究者の鑑として尊敬を新たにいたしました。なお、戦後の「厳格な文法統制」の開始時期を 1947 年としておられますが、中学校学習指導要領で文法項目の学年指定が法的拘

束力を持つとされた 1958 (昭和 33) 年が一つの画期ではないかと思いました。＜みかん舟＞

◆文法統制がもし現代も穏やかな文法統制であったならば、日本人の英語能力はどうなっていたのだろうか、と考える講演であった。そして、改めて、正則がいかに日本人にとって学習環境に良き影響を与えていたか感じた。またリーダビリティについて興味（関心）があるので、今後、積極的に資料を拝読していきたい。＜みっと＞

◆幕末以降、英語によって日本にもたらされた学問（すなわち英学）の基礎を培う教科書は、やはり海外から輸入された英語読本でした。やがて国産の英語教科書が生まれ、わが国の英語教育を支える教材として進化を遂げていきます。その進化の過程で、学習者への配慮がどう施されてきたか。これを通時的に測ることができれば、現在そしてこれからの教科書を考える上で、貴重な示唆を与えてくれるでしょう。この学習者への配慮をはかる「ものさし」こそが、小篠先生が「歴史研究と ICT 技術の交わり」の中で追求してこられた「リーダビリティ指標」であることがよくわかりました。しかもこの指標は、日本の現代の学年レベルをベースにしているので、通時的な難易度比較が腑に落ちるデータとして示されます。小篠先生のこの壮大な研究プロジェクトに関わらせていただいていることへの感謝と、さらに発展させていく責任を感じたご講演でした。ありがとうございました。＜Horse＞

研究発表 (15:30～16:40)

「新制高等学校発足期の入学者選抜における英語の位置付けについて：高知県を例に」

河村 和也（東京電機大学）

【概要】新制高等学校の発足期、特にその初期においては、文部省の指針により入学者選抜そのものが実施されなかったが、後にその指針は大きく転換されることとなる。一方、アチーブメント・テストによって中学校卒業時の生徒の学力を測定することは早い段階から行われており、マスメディア等では入学者選抜における学力検査との混同も見られた。当時、高等学校への「全員入学制」が採られていた高知県では、入学者選抜全般の取り扱いこそが県民にとっての大問題であり、英語に関する議論の形跡はあまり見られない。ただし、初期から英語のアチーブメント・テストは実施されており、その内容と形式は年を追うごとに少しずつ変化していることがわかる。



【参加者の感想】

◆膨大な資料を駆使して、先生が直面した疑問（昭和 27 年度に高知で英語の入試が実施されたのか否か）を解明する過程はまさに上質のミステリーを読

んでいるようでした。また、高知の特殊な教育状況についてのご説明も大変興味深いものでした。次回のご発表を楽しみにしております。＜Emma＞

◆終戦後の新学制発足初期の時代については、ある時期まで史的研究の対象とするには新し過ぎるとの考え方があって手つかずのままに來たように思いますが、本日の御発表を伺っていて、今にそのツケが廻って來ているように思いました。特に今回の高知県の場合など、中央の施策を追っかけるだけでは見えないものが多く、調査も大変かと思いますが、引き続きの御研究を期待しております。ただ、本日の御発表自体は話題として面白い点が多いものの、戦後初期教育史一般の研究からもっと英語教育史のほうに引き寄せての御発表を伺いたかったと感じました。次回の御発表を楽しみにしております。

<Dragon>

◆緻密な調査・分析により、新制高校発足期の高知県の入学者選抜における英語の位置づけの推移をよく理解することが出来ました。ご発表を伺っていて「自由民権運動」の歴史が全体を下支えしている印象を受けました。<もみじまんじゅう>

◆河村先生の発表から、個人的に喜んだのは、研究の仕方・進め方というものがよく伝わって來ました。疑問・資料収集・分析・まとめ（評価と課題）がよくわかりました。今回の発表から、さらなる疑問解決という課題に向かって歩みがつづいていくようです。ありがとうございました。<Qats>

◆同じ中四国地方ではあるが、高知県が全入制度をかつて取り入れていたことは初めて知った。そして「英語」が試験として課せられていなかったことにも驚きである。当時の該当学生ならびに教育関係者の戸惑いは、はかりしれない。<みっと>

◆学力検査に英語を課す都道府県の開始時期がばらばらであったことは承知していましたが、アチーブメントテストと学力検査との扱いがまちまちで、戦後の教育政策の中での位置付け等がからんでいたことがよく分かりました。英語の問題の中に今では考えられないような設問があり、興味を引かれました。

<JH4DGW>

◆高知県の当時の新聞や入試問題の歴史的史料をよくぞ発掘されているなど思いました。<Mappy>

◆高知県における入試への英語の導入について、巧みな話術で謎解きのようなワクワク感で探求が進行し、実に面白く拝聴しました。論文化をぜひお願いします。<みかん舟>

◆新制高等学校発足期に高知県では公立高等学校の「全入制」を実施していた、というお話を聞き、現代の中学生たちがとてもうらやましがらうなと思いました。しかし、入学試験なしに入学してきた学力差のある生徒たちへの授業はどのようなものだったのでしょうか。当時の高等学校の現場の教師たちはどのように対応していたのでしょうか。とても興味深く思います。<Rainbow>

◆戦後の新制高校における英語教育の状況を、入試科目への導入という視点で切り込んだ、たいへん興味深いご発表でした。「アチーブメントテスト」とは何であったか、当時の入試を理解する上で重要な鍵であると感じました。一つの資料から生まれた疑問を解き明かすために、別の資料と照らし合わせて吟味し、その答えを導き出すことの繰り返しが面白いなあ、と心底思いました。ありがとうございました。

<Horse>

研究例会全体について

◆いつものように研究例会すべてが「ダイヤ」通り円滑に進行。事務局、役員の皆様の事前の周到なご準備の賜と感じました。例会での質疑応答もとても学術性の高いやり取りだったと思います。また、懇親忘年会も楽しい集いでした。

<もみじまんじゅう>

◆久しぶりに福山地区での開催となり、懇親忘年会も楽しませていただきましたが、妹尾先生が亡くなられてからというもの、備後地区をカバーするような研究分野の発掘、研究者の勧誘が課題となっているように思います。蘭・英学においては中国地区においても一大拠点となる地ですので、空疎な風が吹き抜けるばかりのシャッター商店街にならないようにと願うばかりです。<Dragon>

◆懇親忘年会ではア・ラ・カルトは料理だけでなく、歓談も探求・人生模様がア・ラ・カルトに語られ、親交の深まるものとなりました。交通便のよい研究会場と小粋な食事処、お世話いただいた先生方、ありがとうございました。<Qats>

◆著名な先生方と同じ空間に居れたことだけでも、この例会に参加した意義があった。<みっと>

◆会場が福山駅から至近距離でとてもよかったです。来年予定の清心女子高校は駅から少し距離があり、ご迷惑をおかけすることになるかと心配です。

懇親忘年会も楽しい雰囲気でもあったのですが、できれば全員顔の見える場所の方が望ましいと感じました。<JH4DGW>

英学史学会全国ニュース

>> 「日本英学史学会報」No.138

2016年1月1日発行。次の記事などが掲載されています。

《英学史散策》

米国探訪記—札幌農学校教授 W. P. Brooks の足跡 4 (赤石 恵一)

モンソンに眠る国友瀧之助(2)—米国で造船を学んだ留学生たち (塩崎 智)

頭本元貞の本名は「かしらもと」(三好 彰)

イェール大学訪問記—重見周吉の足跡を

訪ねて(1) (菅 紀子)

ほか

※パソコンでの閲覧を希望する支部会員の方へ「日本英学史学会報」のPDFファイルを無料で提供いたします。ご希望の方はメールにて、支部事務局までご連絡ください。

(eigaku@tom.edisc.jp)

※日本英学史学会(本部)の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です(入会金2,000円、年会費7,000円)。

中国・四国支部ニュース

>> 『英學史論叢』第19号原稿募集について

中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第19号(2016年5月発行予定)の原稿を募集しています。

・ご投稿に際しては、ニューズレターNo.83、『英學史論叢』18号、およびウェブサイトに掲載の「執筆要領」「標準書式」に従ってください。

・原稿提出の締切は、**2016年2月20日(土)**(消印有効)です。事務局まで郵送してください。

・研究論考・研究ノート・投稿は3部、英学史随想・時評・書評の原稿は1部お送りください。

>> 平成27年度第2回理事会

2015年12月12日(土)、福山例会に先立って開催された理事会において、今年度の活動報告および平成28年度活動計画について協議しました(出席者6名)。以下、来年度の行事予定です。

支部総会・第1回研究例会

5月28日(土) 安田女子大学(広島市)

第2回研究例会

12月10日(土)、清心女子高等学校(倉敷市)

平成28年度第1回(通算第74回)研究例会発表者募集

平成28年度第1回(通算74回)研究例会を、2016年5月28日(土)に安田女子大学(広島市安佐南区)で開催の予定です。研究発表(持ち時間は質疑応答を含めて60分程度*)を希望する会員は、(1)発表題目、(2)発表者氏名(所属)、(3)発表概要(200字程度)、(4)使用予定機器、以上4点について明記の上、事務局までお申込みください。

申し込み先 ・メール eigaku@tom.edisc.jp

・ファックス 0824-74-1724 (馬本研究室直通)

・郵送 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562 県立広島大学馬本研究室

申し込み受付期間: **2016年2月22日(月)～3月22日(火)**

* 申込者多数の場合は、時間調整を行う場合がありますので、ご了承ください。

広島英学史の周辺(51)▼その漫画古書店の地下には無限の広さを持つ書庫(通称「ダンジョン」)があり、ここで見つからない漫画は一冊もない、と言われている。こんな夢のような古書店を舞台にした漫画『金魚屋古書店』は、私の元気の源です。▼金魚屋のダンジョンやバベルの図書館のような「書物の迷宮」に迷い込みたいと、今日も書店や図書館に足を運びます。この時間をちゃんと持てるかどうか、私の心のバランスを保つ秘訣だと気付きました。そして次に手にした漫画は『暴れん坊本屋さん』。▼書物の流通や蓄積のことを思いながら、「漫画英学史」のテーマを構想しています。(馬)

日本英学史学会中国・四国支部ニューズレター No.85

2016年1月31日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 田村 道美)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: 0824-74-1725 (研究室直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.85 January 31, 2016